

氏名	JIN Long (キン リュウ)		
学位の種類	博士(芸術)		
学位記番号	甲第82号		
学位授与日	令和2年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	アートにおける磁力の可能性 —自作に見る欲望と生命エネルギーの表現—		
審査委員	主査	教授	小川 敦生
	副査	教授	濱田 芳治
	副査	電気通信大学 情報学専攻 准教授	児玉 幸子
	指導教員	教授	多和 圭三

内容の要旨

本研究は「アートにおける磁力の可能性」というテーマに取り組んで、自作における磁力の表現により、「生命エネルギー」と「欲望」を表すことを最終的な目標としている。また、他の作家の実例を踏まえたうえで自作についての可能な限りの客観的な分析と可能性の考察を試みる。

序論で、筆者は研究のきっかけ、背景、目的、または本論文の流れについて述べる。

第一章「磁力に関する考察」では、筆者は物質、地球、人間の三つの視点で磁力について考察した。物質の視点では、磁力は原子や電子のレベルで物質を根源的に支えている。地球の視点では、地磁気が現在の地球の環境の基盤となっている。人間の視点では、磁力は電気利用などの面において現代社会におけるかけがえのない存在である。これらの視点から得た研究内容を、磁力を自作に用いる基盤とした。

第二章「磁力を利用したアート作品」では、先行研究として3人のアーティストの例を挙げた。ヴァシラキス・タキスの「力やエネルギーとしての磁力の表現」、児玉幸子の「磁力の形態化」、松岡圭介の「磁石と砂鉄によるテクスチャー」という三つの例から、磁力をアート作品で実際に生かした作品について考察した。

第三章「自作と磁力」では、物質性と精神性の両面から、自作と磁力の繋がりを論じた。まず、筆者は磁力の媒介である鉄と磁石について述べた。その中で、筆者は鉄を「人工の鉄」と「自然の鉄」に分けた。人工の鉄は、人間の「欲望」が生み出したものゆえ、人間の「生命エネルギー」が含まれていると考えた。そして、自然の鉄と人間が精錬・加工した鉄のどちらにも、自然界に存在する「生命エネルギー」が含まれているという考えにいたった。また、無機物と有機物の間にもエネルギーの循環があると考え、自作においてそのことを表現した。そしてエネルギーの循環を起こす原動力を自然界に見出し、そこから人間の「本源的欲望」が発生していると考えた。そこで、筆者は鉄に見出した人間の「欲望」と「生命エネルギー」を中心に論を進めた。磁力を「欲望」に見立て、「生命エネルギー」が転換したものとして、作品に用いた。

第四章「自作の表現手法とプロセス」では、「磁石と砂鉄によるテクスチャー」について述べた。まず、筆者はこの磁力表現を二つの方向性から検証した。一つは砂鉄を使った磁力表現

による毛皮のようなテクスチャーで「生命エネルギー」を表現する方向性である。そこで、鉄と磁石で作ったどういうテクスチャーに毛皮のような特性を感じるか、どういうテクスチャーから「生命エネルギー」を感じ取ることができるかについて分析した。実験作品の例を踏まえて、実際にはどのように磁力を作品で表現したかについて述べた。もう一つは磁力表現に「自然にある模様とパターン」を用いる方向性である。毛皮の表現に啓発され、たとえば植物の葉脈など自然界にある模様とパターンから「生命エネルギー」を感じ、もっと豊かな表現を探せるのではないかと考えた。その中で、筆者が着目したのは、エネルギーの流動性だ。自然界にある「流れ」と「分岐」の模様とパターンと、実験作品に用いた実例をそれぞれ考察した。「自然界にある模様とパターン」を用いた実験とそれを応用した試作を踏まえて、より強く「生命エネルギー」を表現する可能性を探究した。その後、自作における「形」のエレメントを二つに類別して考察した。

本研究の結論として、まず言えるのは、第一章の考察から、磁力は物質、生命、人間社会にとって、かけがえのない存在だと分かったことだ。一方、自作で筆者は、磁力表現によって、いかにして「欲望」と「生命エネルギー」が表現できるかを探ることができた。筆者は今後も、素材の魅力を抽出しながら磁力の特性をアートに用いる可能性を探究していこうと考えている。

審査結果の要旨

パフォーマンスやインスタレーション、映像や写真、コンピューターグラフィクスを含めて極めて多様な表現手法による作品が当たり前のように存在するようになった現在の美術の世界ですが、磁力を利用して新たな魅力を垣間見せてくれる表現は意外と少ないのが実情です。その現状の中で、JIN Longさんは博士後期課程に進学する前から磁力を積極的に用いたアート表現を、作家として模索してきました。

JINさんが博士前期課程(修士課程)の頃制作した、クマを模した大型の彫刻作品《BEAST》では全身を砂鉄で覆うことによって体毛をリアルに表現し、そばに寄った時の意外感とのギャップで見る者の心を開きました。博士後期課程では磁力による表現をさらに発展させるために、論文の大テーマとして「磁性」の探求を始めました。

先行研究ともいえるべき磁力利用の美術作品の先例の検証では、ヴァシラキス・タキスや児玉幸子ら先達アーティストの生み出した表現をクローズアップ。彼らが磁力でどんな表現をしてきたのか、ということをはっきりさせたこと自体が意義深く、美術の世界における磁力の可能性を垣間見せてくれました。タキスは20世紀半ばに電磁石などを用いた制作をする中で性欲などの人間の本能をテーマにした表現をしており、技術とアートの結びつきを見るうえでとても興味深い作家だったことが分かりました。今も新たな表現に挑み続けている児玉幸子は、先端技術を使って磁性流体をコントロールすることでさまざまに姿を変える可変彫刻とでもいえるべき新しいアート作品の形を提示してきたことを詳らかにします。一般社会では実用的に用いられている磁力を、先端技術を使って美術の世界で利用することにより、従来の美術の世界にはなかった表現を切り拓いてきたことを印象づけました。

そもそも、電動モーターや発電技術等の例を挙げるまでもなく科学技術の基本要件である「磁力」は、特に現代の社会にはなくてはならないものです。むしろ普段は意識していなくてもごく当たり前存在する、空気のような存在であるといっても差し支えないかもしれません。そんな世界に生きる中で、JINさんの研究で特に興味深い展開を示したのは、引力を持つ「磁性」を人間の「欲望」になぞらえたことです。これは、アーティストならではの発想です。磁性が生じる最も身近な媒体は鉄ですが、JINさんはまず、鉄の中に人工の鉄と自然に存在する

鉄の2種類があることを確認。さらに考察を深めて行き、そもそもその鉄というものが人間の「欲望」を象徴していることに行き当たります。作品では、自然の存在である砂鉄を主たる材料にすることによって、人間の「欲望」をどう表現するか模索を展開したのです。

「欲望」という言葉にはしばしばマイナスイメージがつきまといまいます。しかし、論文の中ではJINさんはフラットに、そして多様な角度からアプローチすることで、「欲望」の存在意義そのものへの問いかけをも試みました。考えてみれば「欲望」は人間を動かすエネルギーの源です。食欲は生命活動を維持し、性欲は種を存続させます。一方でそれらが環境を破壊したり戦争を引き起こしたりする原因になることもある。「欲望」の探究は、人類の存在意義を問うことにもつながっているのです。その探求のきっかけがアート作品による表現によってなされるならば、それはまたアートというものの存在価値をも問うことにもなりうるのではないのでしょうか。

とはいっても、単に磁石を使って、たとえばただ宙に何かを浮かせたようなものであれば、それだけではアート作品にはなりません。しかしJINさんは、論文で研究のテーマに据えた「欲望」を、いかにして実際に磁力を使って表現するかということをもさまざまな手法で追究します。

最も象徴的な作品として、主査や副査を担当した教員の間で認知されたのは《黙す大地》でした。人間の脳のような外形を持つ《黙す大地》は、表面を砂鉄で覆い、さらには床に接する部分にも砂鉄を散り敷くことによって、脳という人間の「欲望」の発生源自体が実は大地から育ち始めた植物だったかのような印象を与えます。そもそも、実際の人間の脳は、この作品のように毛むくじゃらであるということは決してありません。また、JINさん自身、それが脳を模したものであるということは言っていません。しかし、この作品を目の当たりにすると、そこに人は脳としての存在感を見出すし、それが毛むくじゃらであることにも、大地に根ざしたものであることにも少なからぬ説得力を感じるのです。それは、動物や植物であることを超えた、「欲望」という生物の意志を表しているからでしょう。

JINさんはまた、実は生物に由来する有機物にも鉱物などの無機物にも、同じようなエネルギーの発生や変換などの現象が起きていることを、論文の中で取り上げています。それはエネルギーによって活動を支えられている生命の定義の根幹への問いかけでもあります。もちろん原子レベルで見ればすべての物質において盛んにエネルギーの変換や物質間でのやり取りが起きている。だからこそ、エネルギーという視点で見れば、有機物も無機物も実はそれほど大きな違いのある存在ではない。そういったことから、鉄は無機物なのだけれども有機物に近い表現がごく自然にできるということを論理的に導き出しました。

少々変わった視点を提示してくれたのは、磁力を利用した模様の実験です。美術分野の表現とはいえ、科学技術を利用しているので、実際にどんな表現が可能になるのか、「実験」を行うのは必須です。その結果、先に提示された動物の毛並みなどはもとより、砂漠の砂の動き、人間の肺の血管の広がりに見られるフラクタル性などとの共通点が見出したのも、磁力の実験による一つの成果であるのと同時に、有機物・無機物に関わらず自然といかにつながりのある表現が磁力を利用したアート作品でできうるかということを示すことができたように思います。

クマを模した博士前期課程の修了制作《BEAST》から進化をしたかのように制作されたのは《MONSTER》という作品でした。JINさん自身が「動物シリーズ」と言っているように具象作品なのですが、それはタイトルのごとく怪物化の様相を見せながらも実は根をはやした植物に近い存在となり、さらには生命エネルギーを磁力で表現することで「欲望」が生と死の間を循環するコンセプト的な側面を持つものでした。ゆくゆくは土に帰り、また新たな生命につながっていく。そんな様相を見て取る事が出来るこの作品においては、もはや具象抽象という区別は重要なことではないようです。《黙す大地》や《MONSTER》はまた、展示の場を変えるたびに砂鉄をまぶし直す作業を必要とする作品です。つまり同じ造形を保つことを前提としていない。人間を含めてまさに生命を持つものは、実は日々細胞が成長し姿を変

えているわけですが、それはJINさんの作品と同じく、体の内外でエネルギーのやり取りをしているからこそ生まれる変化でもあるわけです。そしてそれを支えているのが「欲望」である。JINさんは、磁力をアート表現で用いることで、とても興味深い生命の本質を暴き出していることが分かります。

本論文を、アート作品における磁力の可能性を丁寧な実験と実際の創作に基づいて提示した数少ない貴重な論考として、高く評価します。

(小川敦生)